「高遠の母ちゃん」の“子育て村”づくり挑戦

―農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一―

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕
「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など

長野県伊那市高遠町といえば桜で全国的に知られる。その山あいの自然豊かな中にＮＰＯ法人フリーキッズ・ヴィレッジ（以下「フリーキッズ」）がある。フリーキッズは「子どもたちに“自然とつながり、人とつながる村”を伝えたい」として、不登校や山村留学の子どもたちを受け入れ、寄宿生活しながら「山里での自給自足の大家族生活をベースにした暮らし」を体験させることによって子どもの自立を支援する活動を展開してきた。

2004年に子どもの受け入れを始め、09年にはＮＰＯ法人化し、現在、正会員は83人で、会員からの会費や寄付金等によって運営されてきた。実は筆者も縁あって、5年ぐらい前から出入りしており、この3年ほど理事をつとめてもいる。

このフリーキッズの中心になって引っ張ってきたのが理事長である東京出身でＩターン者の宇津孝子さんだ。宇津さんは、フリーキッズと並行して社会的養護が必要な子どもたちを預かるファミリーホーム（小規模住居型養育事業）に取り組んでいる。里親として幾人もの里子を育ててきているが、目下、6人の里子と一緒に暮らしており、「高遠の母ちゃん」と呼ぶ人もいるそうだ。

里子と一緒に花を移植する宇津さん（上）と民家を改造したフリーキッズの建物

根っこにあるのは自然の中で子どもたちを育てながら「子どもたちの『ふるさと』をつくる」という熱い思いだ。細身の体ながら連日、子どもの世話をしながらの東奔西走。その情熱と行動力には頭が下がるとともに敬服するばかり。

ところでフリーキッズの活動も15年を経過したことから、「子どもたちの『ふるさと』」づくりに若い世代をも巻き込み持続性を獲得していくとともに、「この地域を“子育て村”」としていくために、取り組み内容や運営体制の見直しを行いつつある。この5月11日に開催された総会では、子どもたちの集まり・学びあい・つながりの場の拠点となる「やまのいえ」の改修等により環境整備をはかる、このためのクラウドファンディングの実施、子どもの交流の場・遊び場を提供するプレーパークの開催、子ども食堂の開催、自然農による農作業体験等々を行うことを決めた。これらとあわせて注目したいのが、里親支援講座の開催、社会的養護の家庭を招待しての「里親・里子交流キャンプ」の実施や要保護児童のファミリーサポートへの取り組みである。まさに里親事業とフリーキッズの活動の一体化がすすめられつつあると見ることもできる。

集落内には宇津さんの活動にひかれてＩターンして里親を始めた家庭が一軒あり、近くの集落でもＩターンした家族がファミリーホームをはじめているという。厚生労働省は16年に児童福祉法を改正して、要保護児童の施設養育優先から家庭養育優先へとかじを切り替えており、里親への委託増加を目指している。宇津さんによれば里親手当によっておおむねの生活費は賄うことができ、里親をしながら農山村で農林業をはじめとする多業的な活動展開が十分可能だという。農山村に里親を増やし、自然豊かな環境の中で子育てをすると同時に、農山村の再生につなげていくという壮大かつ人にも自然にもやさしいビジョンへの挑戦が始まっている。